



あたたかくどこか残酷で生命の尊さを思わせる  
美しい“赤”と独特な世界観。

絵本作家・出久根育(1969-)の表現の根底にあるのは、  
幼い頃の“数えきれないほどの絵本との出会い”。

1994年に処女作『おふる』\*でデビューした出久根は、2003年、  
グリム童話『あめふらし』のイラストで、歴史あるブラチスラバ国際絵本  
原画展のグランプリを受賞。自身が恩師と慕うドゥシャン・カーライ  
(1948-)をはじめ、さまざまな出会いを経て、代表作『マーシャと  
白い鳥』では、中東欧の風土と伝統に根付いた美しさが画面に溢れ  
出し、2002年から移住したプラハでの生活が作品に別の命を吹き込  
んだことがわかります。

日本を離れて20年以上、「チェコのグリム」と評される、カレル・  
ヤロミール・エルベン(1811-1870)が収集した民話の挿絵を手掛  
けるなど、テンペラやガッシュを用いた作風で、日本人でありながら  
チェコでの評価も高い出久根ですが、いくつかの転機を経た現在、  
大地が春に目覚めるように“光のあさ”を迎えています。

2023年、出久根が新たに手掛ける作品は、“絵本とともに育つ  
た”幼い頃の自分自身を投影した物語。日本に育ち、チェコで暮ら  
したからこそ描ける、どちらの国でもない不思議な空気感をまとう世界。  
国内外のあまたの作家に望まれ、長年、絵本や読み物の挿絵を手掛  
けて来た出久根にとって、ひとりで絵も文も手掛ける“創作絵本”は、  
デビュー以来、約30年ぶり。本展では、自身をモデルに描いた『わた  
しのおにんぎょうさん』をはじめ、今回が初公開となる、2024年に  
刊行予定の新作2作の原画も展示。中東欧の民話をはじめとする  
代表作はもちろん、初期の銅版画や、子どもたちに人気の「こうさぎ」  
シリーズなど、約180点の原画を通して、真摯に描き続けたこれまで  
の画業を辿るとともに、絵本作家・出久根育の現在の魅力に迫ります。

\* 初出「学研おはなし絵本」(1994年12月号)

EVENT 会場：武蔵野市立吉祥寺美術館 音楽室

01 出久根育のワークショップ「親子でチェコの紙あそび」

1月27日(土) 14:00~16:00

対象：小学生以下 ※必ず保護者同伴 参加費：300円

定員・対象：10組(20名) ※申し込み多数の場合は抽選

\*1月12日(金)まで、メール(museum-ws@musashino.or.jp)のみで受付。

02 出久根育のトークショー「絵本作家としての現在」

1月28日(日) 14:00~16:00

参加費：無料 ※ただし、美術館入館チケットが必要 定員・対象：70名(申込先着順)

\*1月7日(日)10:00より、お電話(0422-22-0385)のみで受付開始。

ただし、1回のお電話につき、2名様まで受付可。



出久根 育(でくね いく)

東京生まれ。1992年、武蔵野美術大学油絵科版画専攻  
卒業。1994年、最初の絵本『おふる』を出版。1998年、東京  
で開催されたドゥシャン・カーライ氏のワークショップに参  
加。同年、ポローニャ国際絵本原画展入選。2003年、グリム  
童話『あめふらし』(パロル舎 2001年/偕成社再刊行  
2013年)でブラチスラバ世界絵本原画展グランプリ受賞。  
2006年、ロシア民話『マーシャと白い鳥』(ミハイル・プラートフ作 / 偕成社 2005  
年)が日本絵本賞受賞。2011年、『もりのおとぶくろ』(わたりむつこ作 / のら書店  
2010年)が産経児童出版文化賞ニッポン放送賞受賞。2005年にブラチスラバ世界絵  
本原画展で特別展示。2011年、ちひろ美術館で個展開催。2002年よりプラハ在住。

- 1.『マーシャと白い鳥』(再話：ミハイル・プラートフ 文：出久根育 偕成社 2005年)\*ちひろ美術館蔵
- 2.『かえでの葉っぱ』(文：ディジー・ムラスコヴァー 訳：関沢明子 理論社 2012年)
- 3.『あめふらし』(作：グリム兄弟/パロル舎 2001年/偕成社再刊行 2013年)\*個人蔵
- 4.『こうさぎとほしのどうくつ』(作：わたりむつこ のら書店 2016年)
- 5.『わたしのおにんぎょうさん』(作：でくねいく 偕成社 2023年)
- 6.『命の水 チェコの民話集』(編：カレル・ヤロミール・エルベン 訳：阿部賢一 西村書店 2017年)

